

# ヤマネコが生きる国境の離島「対馬」発！ 地域内外の人を巻き込む、伝え方・共感の生み方

## 環境省ローカル SDGs 地域循環共生圏セミナー 第4回講演編 開催レポート

地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業では、地域の環境・経済・社会を元気にしたいと考える人たちが、一步を踏み出す「きっかけ」や「学び」を得るためのセミナー「環境省ローカル SDGs 地域循環共生圏セミナー」を開催しています。

第4回講演編では、一般社団法人 MIT 代表理事 吉野 元さんをお招きし、『新たな仲間や応援者を巻き込むための、伝え方・共感の生み方』をテーマにお話いただきました。

その内容をレポートします。

### 吉野元 (よしの・はじめ) さんプロフィール

- 一般社団法人 MIT 代表理事
- 宮城県仙台市出身 / 東北大学・大学院卒 (生命科学博士)
- 環境省自然環境局(非常勤)、(株)レスポンスアビリティを経て、2013年6月に対馬に移住、MIT に就職。2017年より代表理事に就任。佐護ヤマネコ稲作研究会事務局長、対馬市観光物産協会理事、対馬もりびと協同組合専務理事を兼任

### 国境の離島対馬は、最先端の課題先進地

最初に、今日お伝えしたいことの結論からお話します。相手に伝えたり、共感を得たりするために、私はこのようなことを大切にしています。

- ビジョンや事業構想をわかりやすくまとめること
  - シンプルな言葉とイラスト(右脳)で伝える
- 自分自身がわくわくできる事業であること
  - 横断的・異分野の連携によるイノベーション
  - WIN-WIN-WIN-WIN になる仕組み
- 相手に主体的に関わってもらう仕組みにすること
  - 社会の Will、事業の Will、個人の Will を一致させる
  - 仲間や応援者の想いを知る
- 熱く語り続けること
  - うまく説明できなくてもいい
  - 一度だけでは伝わらない。何度も繰り返し

- 強力なパートナーをしっかりと確保し、自分ごとで語ってもらう

これらについて、対馬での活動を紹介しながら深掘りしていきたいと思います。

次に、対馬について紹介させてください。

私は、対馬を「最先端の課題先進地」と捉えています。対馬は国境にあり、古来大陸からくる船は必ず対馬を通過してきました。そのため、大陸の歴史や文化として継承されていることが多くあります。一方で、良い意味で日本の進化から取り残されているものもあります。離島であり、社会課題がコンパクトにまとまっているとも言えます。ここで持続可能な社会を作ることができれば、それを日本全体に広げることができると考えています。

野鳥の島でもあります。日本で見られる野鳥のうち約 **300** 種類を観測することができ、バードウォッチャーの聖地です。鶴が日本に渡ってくる時の中継地でもあります。

また、ツシマヤマネコが生息している島です。ツシマヤマネコは、**10** 万年前からここで独自の進化を遂げていると言われていました。ヤマネコがいるということは、ヤマネコが暮らせる環境が残っているということであり、人々がヤマネコが絶命しないように暮らしてきたということでもあります。

自給自足の島でもあります。豆腐・こんにゃくも自分たちで作りますし、お肉はジビエです。集落によっては、**100%** 自給自足をしているところもあります。お裾分け文化が盛んで、社会資本がゆたかです。お魚も、東京で食べるとすごく高価になるようなものを、お裾分けでいただくことができます。例えば、ハガツオなど、悪くなりやすく旬が非常に短いお魚を、美味しく食べられます。こうした文化が、対馬のゆたかな生活をつくっています。

一般社団法人 MIT (ミット) は、対馬を中心に活動しています。「みつける」「いかす」「つなぐ」の頭文字を取って MIT です。最近知ったのですが、ドイツ語だと「ともに」という意味もあるらしく、奇しくも地域や誰かと「ともに」ある私たちが表す言葉だったのだなあとと思っています。

MIT は対馬の地域おこし協力隊 **2** 名がきっかけとなり立ち上げた、ベンチャー企業です。**10** 年活動してきた中で、色々な人が入り、そして巣立っており、MIT から **6** つの法人・事業体が誕生しています。例えば、民泊の斡旋・滞在型観光などの旅行コンテンツを提供している会社があります。また、フラットアワーという会社は持続可能な漁業をやっており、船上で商取引を行い、漁協や仲介を通さずに新鮮な魚の販売をしています。

現在、MIT は常勤の正社員が **6** 名います。**1** 人を除き、移住者です。若い人が集まっている会社でもあります。

MIT のバリューは、「イノベーションを生み出す触媒 一カタリストになる」ことです。私たちがあらゆるものをつなぐ触媒の役割を果たすことで、様々な化学反応が起こることを

目指しています。例えば、林業事業者と漁業事業者がつながることで新しい事業が生まれる、大学と地域を繋ぐことで新しい教育モデルができる、などのことです。横断的な活動にこそ、私たちの強みがあります。

現在、計画策定などの行政策定支援・調査業務などを行う「みつける部門」、各種デザイン・イラストづくりや、グッズ制作などを行う「いかす部門」、直営店の運営などの販売を行う「つなぐ部門」の3つの部門があります。

## 環境保全の意識だけでは続かない。農家・消費者・環境のWin-Win-Winな関係をつくるヤマネコ米の取り組み

ここから、MITの活動について「森里海」それぞれの観点で紹介していきます。まず、「里」の活動として、佐護ヤマネコ稲作研究会の取り組みがあります。

ヤマネコは里の様々な環境を使いながら生活しますが、特に湿地を使います。そのため、湿地である田んぼの環境をいかに守るかが大切です。

そこで生まれたのがツシマヤマネコがいる田んぼで育てた、ヤマネコ米です。第三者認証の仕組みはありませんが、減農薬で育てており、実際にヤマネコが生息している場所でできたお米です。減農薬は人の体にも良いので消費者のためにもなります。消費者の中にも、良いものであれば、少し高くても選択的に購入していこうという動きがあるので、そうした方に選ばれています。

減農薬がヤマネコにどう影響するかは、様々な要素が関係することなので、一概には言えません。ですが、たしかにヤマネコが暮らしているということを実際に観測し、農家の皆さんに継続的に発信することは大切にしています。琉球大学と連携して自動観測カメラを田んぼに設置しており、それを通してヤマネコの生息を確認・発信しています。

## 継続的に発信しつづける(ターゲットは明確に)



また、相手の共感を得るためにイラストは有効です。ヤマネコ米はただヤマネコの名前がついているわけではなく、ヤマネコを守る活動にたしかにつながっていることを伝えるために、課題・活動内容・意義をイラストで見える化しています。

# 課題・活動内容・意義を見る化する



今はお米は格安で手に入る世の中ですが、ヤマネコ米は5kg 3,000円で販売しています。農協におろすよりも倍の価格で売れるため、農家の皆さんも非常に喜んでいますが、ヤマネコを守るためのパートナーである農家さんが、自分たちの労力やコストを犠牲にして減農薬などに取り組む状況では、長く続きません。こうして、Win-Win-Winな仕組みをつくることで、持続可能な取り組みにすることを大切にしています。

一方で事務局である私たちの人件費については、農家さんの利益を守るという観点であまり高くすることはできません。そのため、ヤマネコ米グッズを作成し販売することで、自分たちの利益を確保しています。

ヤマネコ米や関連グッズを販売するための活動はMITが中心となって行っています。全国の動物園との連携はその取り組みの一つです。現在、ヤマネコを飼育している動物園は全国に9つあります。こうした動物園と連携し、ヤマネコ米の販売や啓発に協力をしてもらっています。

また、消費者の方により積極的に活動に参加してもらうために、オーナー制度も立ち上げました。1年間の会員制度に1口30,000円で参加することができます。自分たちの田んぼを農家さんに管理してもらおうという意識で参画してもらい、ファンクラブのような形になっています。新米を30kgお届けするほか、田んぼのイベントに無料で参加できたり、田んぼや

ヤマネコの状況が分かる稲作通信を定期的を送付しており、ヤマネコとのつながりを感じられるような取り組みにすることを重視しています。

## 分かりやすいコンセプトとイラストで、島内外の人を巻き込んだ「食べる磯焼け対策」

次に「海」の活動として、グッドライフアワード 地域コミュニティ部門にて環境大臣賞を受賞した取り組みを紹介します。

対馬には、豊かな水産資源があります。東シナ海と日本海を結ぶ対馬は、魚の通り道です。栄養価の高い海である対馬は、魚の産卵場としても機能しています。つまり、対馬の海を守ることは、日本全体の海を守ることにもつながります。

一方で、近年対馬には磯焼けの問題もあります。昔の対馬の海は、船外機のプロペラが藻に絡まって船が海に出られないくらい藻が豊かな海だったのに、砂漠化が進んでいます。原因の一つとして、南方系の魚であるアイゴ・イスズミが藻を食い荒らしてしまうことが挙げられます。結果として、サザエ・アワビ・ヒジキなどは、ほとんど捕れなくなってしまいました。

こうした食害魚であるアイゴ・イスズミは、定置網に大量に入ります。もちろんこのことを漁師さんたちは知っていましたが、これらの魚を活用しようとは考えませんでした。なぜならば、イスズミは「猫跨ぎ（猫も跨ぐくらい臭い）」と言われるほど臭い魚だからです。また、バリは沖縄では高級魚として食べられていますが、背鰭と胸鰭に毒があって危険です。美味しく食べられる時期も限られており、それ以外の時期は捨てられてしまいます。

これらを美味しく食べられるようにできないかと研究を始めたのが、水産加工会社の丸徳水産でした。研究の結果、美味しいメンチカツを作ることができ、2019年 Fish-1 グランプリ ファストフィッシュ部門でグランプリを受賞しています。

研究に成功した一方で、各漁師さんが水揚げしたものを丸徳水産に集める仕組みは当時ありませんでした。この仕組みづくりに関わったのが MIT です。もともとあった島内流通の仕組みを活用し、定置網に入った未利用魚が丸徳水産に集まる仕組みをつくりました。

丸徳水産はその後も新たな加工食品の研究を進め、今では学校給食にも提供しています。食育や、地産地消にもつながる取り組みです。

また、島外からの支援もあります。GUCCI OSTERIA 銀座店では、バリを高値で仕入れ、25,000 円のコースの前菜の食材として使っています。また、トランジットジェネラルオフィスは、フィッシュバーガーに対馬の魚をつかい、全国のレストランに展開しています。

様々な人を巻き込むこの取り組みは、「食べる磯焼け対策」というコンセプトで、みんなが喜ぶストーリーをイラストを通して発信する工夫をしました。



## 共通のビジョンとロジックモデルで、大きな取り組みをみんな で前に進める

最後に、「森」の活動についてお話しします。

対馬の 89%は森です。田んぼなどの平地は全体の 1.3%にすぎません。そのため、山の資源をいかに活用するかは対馬にとって大切なことです。

ですが、いま対馬の森は荒れています。山に入るとすぐに分かるのですが、下草が全くないのです。これは森林の管理ができていないことによるものですが、これには、担い手がない・安全性の問題・教育の変化などの背景があります。

そんな中、繁殖に成功しているのがシカです。冬の気温が高くなっていること、猟友会で捕る人が減っていることなどが影響しています。対馬は人口約 27,000 人の島ですが、鹿はその倍近くの 42,000 頭います。年間で 13,000 頭ほど捕っていますが、なかなか被害は減りません。

今、こうした現状を打開すべく、林業事業者と手を組んで新しい事業づくりに動いています。きっかけは、2020年に採択された地域循環共生圏づくりプラットフォーム構築事業です。先進的な事例を取り入れながら、専門家を交えて4年間戦略を練ってきました。

こうしてつくった目指すべき森ビジョンでは、7つのゾーンで構成されるヤマネコの森を構想として描いています。例えば、「しいたけゾーン」「どんぐりゾーン」「みつばちゾーン」「清流と蛍ゾーン」など、多様な生態系をつくることを意識しています。



こうした取り組みを進めていく中で、推進する人も場所も足りていないことに気づきました。そこで、これらを推進する母体として「対馬もりびと協同組合」を立ち上げました。対馬は海が基幹産業なので、漁師さんにも入ってもらっています。ビジョンは、「100年後も人とヤマネコが対馬の森で豊かに生きていく」です。

私たちの事業には、3つの軸があります。

「価値づくり事業」では、木材の価値が下がっている中で付加価値をつける取り組みを行っています。例えば、森の資源を活用した、家具づくりや、エッセンシャルオイルづくりをしています。「もりびとコミュニティ事業」では、人材育成や、行政や企業との連携を行っています。「森づくり事業」では、森の整備・活用や獣害対策などを行っています。

拠点は市から無料で借りている廃校です。まずは、加工品を作ることができる場所をつくりました。ここで、Uターンの若者を雇用して職人として育成しています。最新の機械を導入し、パソコンで図面を設計し、色々な家具や雑貨をつくることのできる状態にしました。



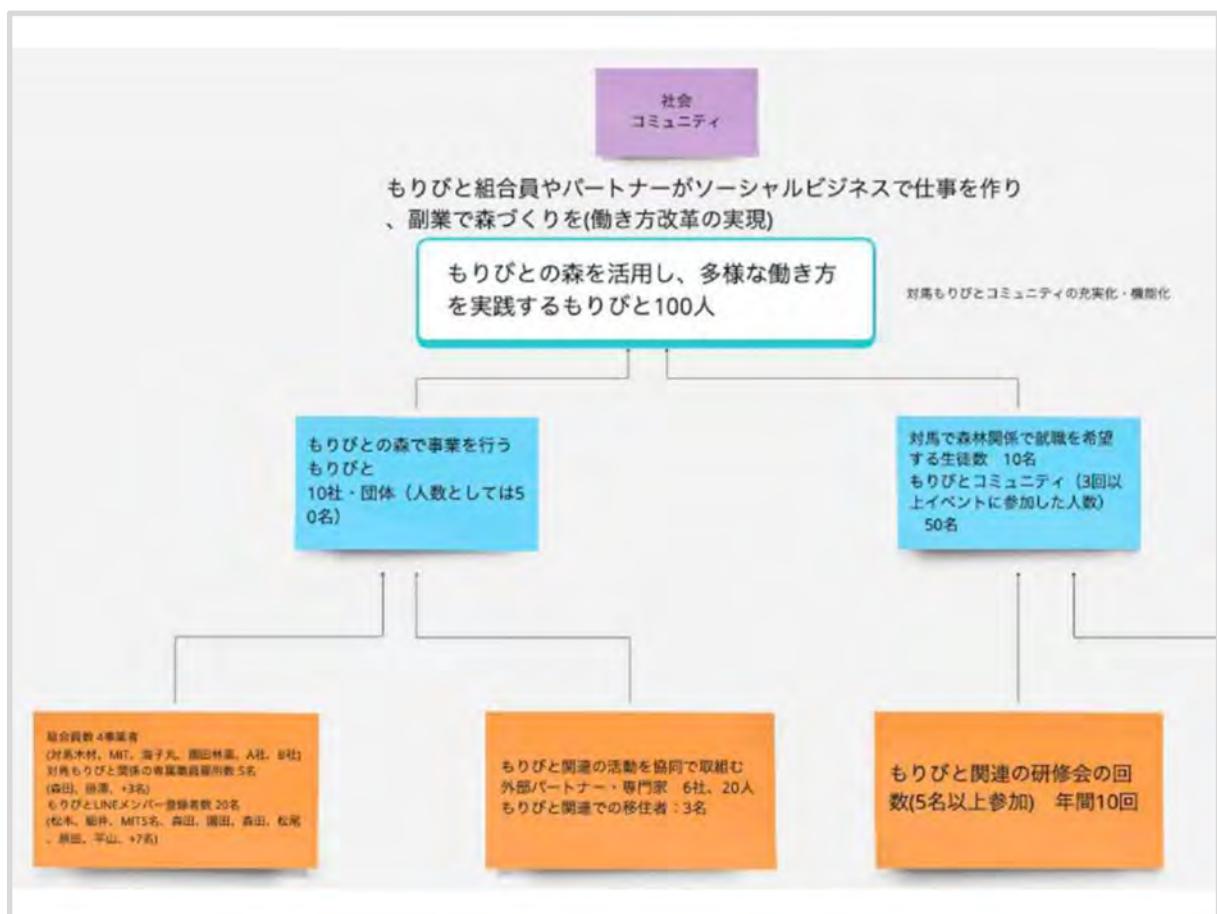
体験メニューの開発も積極的に行っています。消しゴムハンコ教室や、蜜蝋を使ったアロマクリーム作り体験のほか、島内の事業者さんと連携して対馬に自生するカエデからメープルシロップをつくる体験なども行っています。また、MITの顧問でESG推進をしている平山先生を中心に、ドングリを食べてSDGsに参加する取り組みも行っています。

こうした大きな取り組みをたくさんの方を巻き込みながら推進するために作成し、活用しているのが「もりびとロジックモデル」です。

例えば、もりびとの3つの柱として「もりびとの森を活用し、多様な働き方を実践するもりびと100人を生み出す」というものがあるのですが、これを実現するためにどんな活動をするのかを整理しています。

このような形でまとめることで、大きな活動の中でも自分がどのような形で貢献をしているのか見えるようになります。

<もりびとロジックモデルの一部を抜粋>



ここまで、様々な事例を通して、「伝え方」「共感の生み方」についてお伝えしてきました。

冒頭にもお伝えしましたが、改めて「ビジョンや事業構想をわかりやすくまとめること」「自分自身がわくわくできる事業であること」「相手に主体的に関わってもらおう仕組みにすること」「熱く語り続けること」が大切だと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

=====

地域循環共生圏セミナー2023 各回の、講演資料・動画・開催レポートはこちらで確認できます！

<http://chiikijunkan.env.go.jp/tsukuru/seminar/2023/#a-seminar-03>